2023 優駿エッセイ賞
佳作（GⅢ）
受賞作

蝶との挨拶

芝塚（しばつか） るり

受賞のことば

この度は望外のご評価を頂き、ありがとうございます。

今年は馬の仕事を離れてからの節目の年で、記念として書きました。長文を書くのは学生時代以来で大変でしたが、書き進めると馬達との数々の思い出が溢れ出し、牧場での日々は今も大切な宝物だと改めて感じました。今回書いてよかったです。最後に、牧場でいつも私を温かく見守って下さった牧場長ご夫妻と、全ての馬に深く感謝致します。

プロフィール
千葉県生まれ。馬との最初の出会いは小１の歩き遠足で行った中山競馬場。馬と一緒に居たい一心から育成牧場で６年間働いた経験あり。今も道端の雑草を見ると、馬が食べる／食べない、と無意識に判別してしまう。

競馬場でレースを観るのは最前列でと決めている。

馬達の激しい息遣い、なびくたてがみ。蹄が地を蹴る音が振動となって胸にまで響けば、馬達との懐かしい日々を思い出すからだ。

ゲートが開くと馬券もそっちのけで馬達を見守る。全頭故障の無い様に、力を出し切れます様に、と願いつつ観ていると、最後の直線はしんがりの馬を注視していたりする。

ん？　どの子が勝った？　見てなかった…

レースを終えて戻って来る馬達を見届け次のレースのパドックに向かう。どの馬も兎に角無事でと私は願う。育成牧場で働いていた頃からその思いは変わっていない。

乗馬が趣味の丸の内ＯＬから、競走馬育成牧場のスタッフへ。家族をはじめ友人知人にも心配をさせた転職だった。

当時20代半ばの私を受け入れてくれたのは、トレセン近郊の牧場だった。馬主でもある牧場オーナーの持ち馬と、短期放牧で来るトレセンの馬を預かる、いわゆる外厩だ。

競走馬の世界は乗馬のそれとは全く違っていた。放牧とはいえ、次のレース予定がある状態で来る馬も多い。強い調教をしないだけで、日曜以外は調教がある。アスリートが束の間の息抜きをする場だった。

あどけなさを見せる馬が、デビュー後に様子が変わり来るたびにしっかりとしていくさまは頼もしく、乗っていても見ていても嬉しかった。まあ、いつまで経ってもお子様な行動をとる子もいたのだが…それも微笑ましく愛しいのだった。

「オイ聞いたか？　今日来る牝馬、オーナーの馬だってよ」

父は代表的なＳＳ系種牡馬。気性が荒くなければいいな、と少し気になる。

その日は十日に1度回ってくる当番の日だった。真昼と夜に各馬房に行き、空になった飼い葉桶を外し飲み水をきれいなものに交換するのが仕事だ。

夜に厩舎に行くと彼女が居た。

艶のある黒鹿毛、流星が鼻までかかっている。馬房に入り名を呼ぶと側に寄ってきた。そして突然私の顔に鼻を近づけたので、噛みつかれるのかと一瞬思ったが、私の右頬の匂いをそっと嗅いできた。近くで見ると鼻の白い部分と粘膜の薄いピンクの色合いが白桃のようで愛らしい。大人しい子だった。

かといって甘えてくる訳でもない。ゆったりと構えるお嬢様といった雰囲気だ。

たてがみと首筋を撫でながら挨拶する。

「初めまして。お前はこの牧場の子だから、ここもおうちなんだよ。よろしくね」返事なのかププンとため息をつく。穏やかな瞳で私を見ていた。

この子は〝お嬢〟にしよう。

私は全ての馬に愛称を勝手につけて呼んでいた。大抵は馬名の一部をもじる。どの子も最初は「え？俺（私）の事？」という反応だが、数日も経つと呼べば側に寄ってくる様になるのがまた愛おしい。

彼女には芸術を連想する馬名がついていたが、オーナーの牝馬の中でも一番お嬢様っぽいから、お嬢がいい。

他の馬房の作業も終え、消灯前に再び彼女の馬房へ様子を見に行く。

「お嬢、おやすみ」既にこちらにお尻を向けて夜食の乾草を食んでいたが、尻尾を上下に一振りして律儀に返事をした。呼び名を気に入って貰えたかもしれない。

お嬢はそれから何度も放牧に来た。多くの馬は牧場に着いた直後はピリピリしていたが、お嬢はいつも馬運車を降りる時から悠然としていた。そして私が「お嬢！」と呼んで馬房に入れば必ず右頬の匂いを嗅ぎに来た。不思議な事に、他のスタッフはお嬢に顔の匂いを嗅がれたことは無いという。馬同士は息を嗅ぎあうのが挨拶らしいが、これはどうやら私達だけの挨拶のようだった。

お嬢は勝ち星を少しずつ重ね、牝馬の重賞レースに出走するまでになっていた。オーナーは獲得賞金で牧場の設備

投資をしていた。ある馬は井戸を掘り、またある馬はウォーキングマシンを増設した。お嬢は約10馬房ほどの牝馬専用厩舎を建て、放牧に来るとそこに入るようになった。自分で建てた家に住む、自立したお嬢様なのだった。

馬のたてがみを牧場を出て行く前日に切り揃えて整えるのは、とりわけ楽しい仕事だった。他には人がいない厩舎で、夕方の飼い葉を食べさせながら長さを揃え、場合によっては編む。馬と2人（?）きりの静かなこの時間が私はたまらなく好きだった。

お嬢のたてがみはトレセンの厩舎できっちりと整えられ、いつも手を加えるところが殆どなかったが、それでも細かく櫛を入れ解かしながら色々と話しかけた。

うちのオーナーは、牝馬は繁殖にあげるんだよ。お嬢は将来どんなお母さんになるんだろうね？　子供も可愛いだろうなあ。産まれたら北海道に会いに行くよ。そしたら子供を紹介してくれる？

私の一方的な話を、たまに飼い葉桶から頭を上げて視線を合わせたり、プルンと鼻を鳴らしながらお嬢はいつも聞いていた。

そうなると信じて疑わない、それは近い将来の話の筈だったのに。

今も私の手元には何枚もの封筒がある。競馬場名とレース名、馬名が書かれたご祝儀袋だ。

オーナーは持ち馬達が勝つと牧場スタッフにご祝儀をくれた。もったいなくていつもなかなか使えなかった。あの子達が輝いた証だから封筒は捨てられなかった。そしてお嬢の最後のご祝儀は今も開封すらしていない。光に透かすと、現在はもう出回っていない一万円札のデザインが浮かび上がる。

ある日のメインレースにお嬢は出走した。ハンデ戦で、一番軽い牝馬とは4キロの斤量差だ。同斤量の牡馬もいるが重すぎないか。競馬開催日は午後の仕事が4時から始まるので、自室のテレビで無事を祈りながらレースを見守っていた。

馬群が最後の直線に向いたところで、視界の真ん中が不自然にガクンと動いた。一瞬何が起こったのか理解できなかった。馬体が沈みこみ、横倒しになり騎手が地面に投げ出される。数秒後、テレビカメラの焦点から外れぼやけつつあったお嬢の、懸命に立ち上がる姿が見えた。

そのシルエットで悟った。

お嬢とはもう二度と会えないのだと。

いつもは競馬の話で賑やかな午後の仕事は誰もが黙りこくっていた。よく、辛い事は話すと量が半分になるというが本当だろうか。お嬢の事を皆で話したら悲しみが爆発的に広がりそうな気がする。

日々馬達とともに沢山の喜びと悲しみを感じ、悲しみにとどまってはいられない。目の前の馬達の世話をしなくてはならない。牧場の仕事で一番辛いのはこういう時だ。

数日後にお嬢はたてがみと蹄鉄だけの姿で牧場に帰ってきた。あのたてがみはたった一握りの毛束で目の前にあった。視界が涙で歪む。サラサラの真っ黒な毛が美しいのが哀しかった。悲しみと怒りを何にぶつけたらいいのか分からない。

他の馬はレースを終えてとっくに厩舎に戻っているのに、何でうちの子はこんな帰り方をしなくてはならないのだ。いつもの様に落ち着いた様子で馬運車から降り、自分が建てた馬房で私と挨拶をするはずなのに。そしていつかは母親になるはずだったのに。

「心もちゃんと帰っておいでね」たてがみをいつもの様に撫でながら話しかけた。

「絶対に見つけるからね」

年が明け、寒さも峠を越えたかという時期の春の真昼の事だった。

その日は当番だった。牝馬厩舎で飲み水のバケツを吊り替えながら、私は一羽の白い蝶が飛んでいるのが気になっていた。水汲みのために開けた厩舎の扉からせわしなく出入りしている。

扉の間から斜めに差し込む陽光の中の白い蝶。飛んでいるのは、よくお嬢が入っていた馬房の前なのだ。

まだ寒い時期なのに蝶なんて。

もしかしたら、という気持ちが抑えられない。作業を終え蝶に近づいていく。動悸が激しい。静かに立ち止まり見つめると少しずつこちらに寄ってきた。

「お嬢なの？」さっきから頭の中にある推測を口にせずにいられなかった。蝶は私の右頬の近くでヒラヒラと飛んだ。

「私が言った事を覚えててくれたんだね。ありがとう」もっと気持ちを伝えたいのに涙が溢れるだけだった。しばらくして蝶は厩舎の扉から外に出ていった。慌てて後片付けをしてから厩舎を出ると、遥か先で機嫌良さげにヒラヒラ舞うのが見えた。何故だかもう追いかけてはいけない気がした。

肌寒い空気の中、何か温かいもので全身がゆっくりと満たされていったあの不思議な感覚を、私は忘れる事はないだろう。

あれから数年後に私は牧場を去った。そして長い年月が経ったが、競馬場でもテレビの前でも私の願いは一つだけ。

皆、無事に帰って来ますように。

待っている人達のもとへ。